

(つづき-その2)

翌19日朝は遅く起床した。近くのスーパーでフィルムを買い、午前10時半から救仁寺行きのバスを待った。時刻表がないから何時にバスが来るか分からない。バス停には、70代ぐらいのおばあさんが6人待っている。農事で苦労した跡が顔の日焼と深い皺、手の甲の皺に歴々と表れている。辺りを気遣いすることなく、欠けた歯並びが見えてしまう程に大声で談笑を楽しんでいる。11時半にバスが来た(救仁寺まで2100ウオン)。バスは南漢江沿いに遡上していく。ある所では、河原に生える低木や芦などに七夕の短冊まがいにビニールが絡まっている。先日の豪雨の爪跡である。バスは次々と停車を繰り返して客を降りさせて行くが、停留所の標識が一つもない。運転手は停車地の名前を知らせることもしない。バス利用者は近郷、地元の人だから、これでも支障がないと言うのだろうか。「乗客の中に登山姿の外国人がいるなどということは知ったことか、知らないよ」なのだろう。行き先が終点の救仁寺なので安心していましたが、そうでなければ、運転手の後ろに立つなり座って事前に降りるバス停名を知らせておく乗り方がよい。この方法でも運転手が忘れて乗り越したことがある。最善の方法は降りるバス停名を運転手に五月蠅がられる程に常に耳打ちすることである。12時に救仁寺入口バス停に着いた。広い駐車場のバスをみると、ソウルや地方の大都市からの直行便があるのがわかる。

救仁寺は大韓仏教天台宗の総本山である。この日は、8月3日から9月2日までの修道月間にあたり、多くの篤信者が訪れた境内は混雑していた。観光客は自分一人ではないかと思われる。修道者は宿坊に泊まり連日祈禱する。男性は少なく、特に年配婦人が多い。若い女性も結構いる。信者は通りすがりの僧侶にも合掌し、南大門を出る際、本堂に向かって深く礼をしていく。清々しい。説法宝殿で法要をしていた。500ウオンの線香を買って供えておいた。殿舎の横の「忘己利他慈悲之極」と刻まれた石碑が目に残った。昼食のため駐車場傍の韓定食屋に入った。山菜ピピンバップ(山菜混ぜご飯)を注文しながら、一人だという意味で人差し指を立てると、例によって顔を顰められた。ピピンバップ以外に豆腐チゲ(小さな豆腐鍋)とゴボウ、ほうれん草、ニラを塩辛で味付けしたもの、白菜と大根のキムチなどが沢山出てきた。一人では食べ切れないほどであるが、食べ切ってしまうとまた嫌がられることもあるらしい。残ったキムチなどは又使い道がありそうかも。2時近くに定食屋を出た。



次の目的地である温達山城、温達洞窟に行くために、2時半発の提川行きバスに乗った。温達観光地まで10分程と教えてもらったが、終点ではないので運転手の真後ろに陣取り温達山城を「ふうふう」と吹き込んだ。他の乗客5名程と共に下車した。山城、洞窟共に観光開発地域にあって入園料3000ウオンを徴収された。温達という名前は、新羅軍の侵入を防ぐため、この辺りで戦った高句麗の温達將軍より借りたものである。温達城の築城年代などは不明で李朝の初め頃には既に山城の機能は失っていたという記録があつた。温達山城を3時半に登り始める。案内板には往復1時間所要とある。登り始めると直ぐに出逢った、

下山して来る途中の中年夫婦は「上に登っても石があるだけ、他には雑草のみ、行っても見るものはなかったですよ、他に何かあるのですか」声を掛けてきた。対応に窮して「いや、何も無いのを見に行くのですよ」と返すしかなかった。3時45分に城内に入ると、そこは50m四方の石垣に囲繞された空漠たる城塞である。内側は背の低い雑草が草むすだけで一片の建造物もない。3m四方の発掘跡がビニールに覆われていた。城壁は瓦のような扁平の石を積み重ねて築かれており、大きな岩石で築いたものではない。城壁の角に登ると南漢江の流れを眺めることができ、南漢江と支流のナムチョン川の合流する要所に城塞が築かれていることが見て取れる。茫然と遠くの景色を眺めていると、音楽堂で習っているテグム(大琴、大型の横笛)の曲調「荒城の跡」をこんな所で吹けば、下手な笛も少しはマシに聴こえるだろうと、ふと思われた。4時半に下山した。



温達山城の少し下にある温達洞窟に寄った(洞窟料金 3000 ウオン)。洞内は摂氏 16 度で涼しい思いをしただけで何の変哲もなかった。李氏朝鮮時代の地理誌「東国輿地勝覽」にも「南窟」と記載されている。山城の麓にあることから昔より「城山窟」と呼ばれてきたが、観光政策により温達洞窟と改称された。

5時半に寧越行きのバスに乗り、30分程で寧越の中心街に着いた(料金 2200 ウオン)。街は丹陽より広域で南漢江の両岸に発達している。メインストリートにはハイカラな店が並んでいる。3軒の時計メガネ専門店が競合していた。小さな街で見られるように1軒が独占しておらず、競合してもやっていける状況にあるようだ。それは豊かさの証であろう。銀杏並木通りに真新しいモーターも数軒ある。夕食はうどん専門店「うどん大店」で天婦羅うどん(5000 ウオン)と蒸し饅頭(2500 ウオン)を食べた。満腹だ。このチェーン店の素うどんは 2000 ウオンと安く、明るい照明とテーブル席がゆったりしていることなどから、若者に人気がある。中学生の男女別々のグループが入ってきた。当時韓国ではまだ男女混成グループが食堂に入ってくることはない。女子中学生グループをみると、制服の小綺麗な身なりである。日本の女子中学生が韓国語を話しているような錯覚に陥りそうだ。

翌 20 日は午前 9 時半に寧越のモーターを出て、傍のタバコ(喫茶店)で 19 日の日記を書いた。タバコの従業員に莊陵の場所を尋ねると、1km 程先にあって歩いて直ぐの所だと教えてくれた。莊陵は李氏朝鮮時代第 6 代端宗の陵墓である。端宗は国民に膾炙された悲運の王である。李氏朝鮮の名君第 4 代世宗(韓国文字ハングルを創製)の孫(文宗の子)として 1441 年に生まれ、17 才の若さで非業の死を遂げた。父文宗が王位について直ぐ亡くなったため 12 才で王となった。即位元年の 1453 年に叔父の首陽大君が国政を奪い、2 年後の 55 年に端宗は退位させられる。首陽大君は王位に就き、世祖となる。2 年後、端宗の忠臣である成三問ら 6 名が復位を図るが失敗し、死を賜わる。彼らを死六臣と称す。他方二臣に仕えずの節を守った 6 名を生六臣と称した。魯山君に降格した端宗は寧越に流配され、復位を図った罪で賜薬(毒杯で自害)となり、1457 年に 17 才で憤死した。テレビや映画でドラマ化され、韓国人なら知らぬものはいない歴史悲話の主

人公端宗の陵墓を觀ようと、観光バス3台に自家用車が20台程が駐車している。陵墓そのものは小さな墳丘でその前に亀、侍人の石像が配された芝生の庭園のようである。他には墓守の屋敷、臣下の位牌堂、端宗歴史館がある。

午後1時半に莊陵を離れ、近くのレストランで豚カツ(6000ウオン)とビール(3000ウオン)を注文した。韓国の豚カツは極めて韓国風である。どんな風かという、履き古した草履のように薄っぺらで大きい。大きさは草履並みである。俎板の上で豚肉を叩いて草履を作る音がトントンと聴こえて来る。何故こんなに薄くするのか、確かに真上から見ると大きく見栄えは良いが、内実は薄っぺらである。2時頃レストランを出て、観光案内板を何気なく見ると、寧越を中心に丹陽、提川、原州、太白への距離が記され、太白の傍に太白山が描かれている。白紙状態の明日を太白山登山で埋めようと即座に決めた。午後2時15分発太白市行きの郊外バスに乗った(6400ウオン)。乗客は6名で終点太白で降りたのは、自分一人であった。中心街で泊まるか、登山口近くの民泊にするか思案した。虫に悩まされる狭い民泊か、それとも中心街の旅館に泊まって朝一番のバスで登山口まで行くかどうかである。太白駅前の市営観光案内所に寄って情報を得ることにした。職員は登山口近くの民泊を勧め、予約を入れてくれたうえに民泊場所の地図を描いてくれるなど感心するほど丁寧な対応であった。勿論バスの時刻表も貰った。



バスに乗る際、運転手にオピオン民泊近くで停めてくれるように頼んだ(料金1000ウオン)。

田舎から太白に買い物に来て帰るおばさん連中で満員である。昼のビールが効いてうとうとしたが、おばさんのつん裂くようなお喋りのお蔭で睡魔に勝つことができた。運転手は5時半に民泊近くに降ろしてくれた。民泊の主人は一人だと聞いて思案顔の後、2万ウオンを要求した。吹っ掛けられたかなと思ったが、部屋は広く、シャワーも良いので満足のレベルであった。ただテレビが映らないと言うと、「点け方を知らない客がいる、後で人をやる」と応じた。何のことはない、主人も点け方を知らないのだ。2時間経って若者が来て漸く点けてくれた。公共放送のKBS

1と2チャンネルだけで民放は映らない。就寝前に太白山登山の下調べと、テレビの台を机代わりにしてその日の記録を書いた。



翌21日は午前6時40分に民泊を出た。食堂はまだ開いてないのでポカリスエットと菓子パンを食べて朝食にした。10分程降った所にある柳一寺入山切符売場には、早すぎるのか職員はおらず入山料を払わずに素通りできた。「早起きは三文の徳」と言うが、後で「得」したことにはならなかった。登山口の標高は650mで太白

山山頂まで910mを登攀する。太白山域は信仰色が濃く、パンフレット表題には「太白山民族の靈山」とある。柳一寺などの寺の他に祈祷師の庵が多い。登山路を歩いていても、庵で拝跪する背広姿の男性が樹木の間から垣間見えたり、祈祷師のオーと言う奇声

やシンバルのようなバーンという金属音が聴こえてくる。また、太白山山頂には直径8m、高さ3m、周り27mで緑泥片麻岩を積んだ円形(基盤は四角形)の天王壇が、將軍峰にも將軍壇が鎮座する。韓国建国記念日(10月3日)には、天王壇で大々的な祭儀が執り行われる。二つの祭壇は重要民俗資料に指定されている。

柳一寺登山口から50分程で2.3km地点の柳一寺への分岐に着いた。ここまでは参拝路なので小型車が通行できる程の道である。その先から礫が多く、岩もある1m幅の登山道に変わった。小白山と同じように標高1200m辺りから樹木は低木となり空が見えだした。伸びきれずに老いた松の老木が厳しい環境に耐え忍ぶように立っている。根元から3m程までは太い幹なのだが、その先は小枝のように痩せて片方に靡いている。日本海側から吹く冬の強風のためである。他の樹木は松のように耐えられないのか殆ど見られず、海の強風に強い松だけが健気に生存しているのだ。9時30分に將軍峰(標高1566.7m)の將軍壇に着いた。將軍壇は民間人の祈禱が許されており、若者が一人長く跪いていた。將軍峰から岩がちの稜線を10分程進んで太白山頂上(標高1560m)に着いた。天王壇の横に太白市長名が刻まれた高さ1.5m程の山名碑「太白山」が立っている。將軍峰が6m高いのに山名碑も何もなかった。遅れて登ってきた登山者に將軍峰は何処かと尋ねられたので、ここの前にあった祭壇のところだと教えた。太白山頂上は50m四方の樹木のない岩がちの平坦地で天王壇だけが異様に目立つだけである。天を祭る神聖な所にしては神域の雰囲気は全くない。石に腰掛けて話した若者は、太白山に失望し、「これから小白山に行くが、余程そっちの方が良いはずだろう」と自分を納得させていた。10時になったのでチョコレートとポカリスエットでエネルギーを補給した。生憎霧が深くなり、少し寒くなったのでウインドブレーカーを着た。頂上には他に10名程屯しているが、霧の中で陰陰滅滅として楽しんでおらず、元気がない。今日の山行の登りは4kmで、7時から9時40分の2時間40分所要した。小白山は登り6.8kmで5時間掛かった。

太白山の頂上には10分程居て、早々に下山した。4.4kmのタンコル登山道を9時50分に降り始め、12時に登山口のタンコル切符売場に着いた。登山口近くにある太白石炭博物館に観光案内所職員も勧めていたので寄ってみた。入口で職員が呼び止め「登山されたのですね、でしたら入山切符を見せてください」と言う。「早かったので切符売場に人が居なかった」「では、入館料2000ウォンです」と言う。早起きしても「得」にならないこともある。博物館は三階建てで、鉍石の標本、採炭、選鉍の展示、坑道体



験など石炭に関するあらゆる事柄を教科書のように展示している。太白市は韓国最大の石炭産出地であるが斜陽化したため、市はカジノを誘致して地域振興を図っている。容易に想像されることだが、数々の余弊もあって、良いことばかりではない。博物館では、「日帝徴用坑夫写真展」(5/25~8/24)を催していた。坑夫が厳しい条件下で労働させられていたことが写真から理解できるのだが、半世紀以上前の戦時下での炭鉍労働ということや当時の生活全般が今ほど豊かでなかったという客観的な観点については全く説明がない。そのため、顔が真っ黒でふんどし姿の惨めに見える炭鉍夫の姿だけが観るものに印象づけられてしまう展示に



なっている。団体客を案内している館の職員は、「一番大事なことは、日帝下で・・・」と説明している。「日帝下」という刀、刀は両刃であるからこれに頼りきって批判し続けると自らをも傷つけることになるという両刃の危うさをもう悟るべきであろう。

午後 1 時 25 分発の太白市内行きのバスで市街に戻る(1000 ウオン)。市の観光案内所で紹介してもらった梨花苑モーターに宿をとった。モーターから 100m 程にある黄池公園に散歩がてら行った。20m 四方の池がある。説明板によると、「洪水や干魃の際も水位、水質が一定している霊池であり、洛東江 1300 里(韓国里、約 520km、韓国最長の河川)の水源池で水深 4m、水温 11 度」という。太白山からの伏流水だろう。今回の山行はソウルから海に注ぐ漢江(南漢江)の源流域にあたる小白山と釜山から海に注ぐ洛東江の源流域にあたる太白山を山行したことになる。

翌 22 日、太白駅午前 9 時 11 分発の無窮花号でソウルに帰京した。

(了)